

機関番号：35404

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19529001

研究課題名(和文) 18・19世紀ドナウ二公国をめぐる国際関係の変容過程に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Transformation Process of the International Relations concerning the Danubian Principalities in the eighteenth and nineteenth Centuries

研究代表者 黛 秋津(MAYUZUMI AKITSU)

広島修道大学・経済科学部・准教授

研究者番号：00451980

研究成果の概要(和文): オスマン帝国の付庸国であるワラキアとモルドヴァには、18世紀前半までオスマン政府の強力な支配が及んでいたが、18世紀後半のロシア、そしてそれに続く西欧諸国のバルカン進出により、両公国はそれらの国々との結びつきを強め始めた。同時に、両公国の諸問題はオスマン帝国とロシア・西欧間の国際問題となり、同問題を通じて、三者は政治外交的諸関係を緊密化させていった。その初期において見られた、諸外国によるオスマン・両公国間の宗主・付庸関係の弛緩の試み、支配者である公と諸外国との接触の増大、などの具体的な過程が本研究により明らかになった。

研究成果の概要(英文): Before the first half of the eighteenth century, the Ottoman government well-controlled its two vassal states, Wallachia and Moldavia. In the second half of the that century, however, Russian, followed by the other European advancement into the Balkans made these two principalities into one of the important issues among Russia, Western Powers and the Ottoman Empire and through this issue, these powers gradually made their connections closer one another. In the early stages, Russia and Western Powers tried to loosen the suzerain-vassal relations between the Ottoman government and two principalities and the prince (voyvoda) increased their connections with the foreign powers. This study reveals the concrete process of these issues.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,700,000	570,000	3,270,000

研究分野：史学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：バルカン、ルーマニア、オスマン帝国、ロシア、国際関係史、西欧国際体系

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する3か月前の2007年1月、バルカン半島のルーマニアは、隣国ブルガリアと共にEU加盟を果たした。冷戦期にバルカンに強い影響力を有していたソ連の崩壊により、ほとんどのバルカン諸国はEU加盟を目指し、またEU自身の積極的な旧社会主義諸国への拡大政策により、EUが東方へと拡大することになった。これらの現象を歴史的に見れば、バルカンという地域は近代以降、西欧カトリック世界、東欧正教世界、そしてオスマン帝国を中心とするイスラーム世界のせめぎ合いの場であり、現在のルーマニアの領域は、いわゆる「東方問題」が、他のバルカン地域に先駆けて生じた場所である。そしてそのせめぎ合いの構図は、冷戦期にやや見えにくくなったものの冷戦終結後再び現れ、現在まで続いていると見ることが出来る。しかしながらルーマニア・ブルガリアのEU加盟に関して、そうした歴史的文脈からの議論は十分にはなされていなかった。このような背景から、冷戦終結後西欧世界と東欧世界のせめぎ合いが生じている現代のバルカンを、歴史的な観点から眺め理解しようとする問題意識を持って行ったのが本研究である。特に、バルカンの中でいち早くEU加盟を果たしたルーマニアに焦点を当てて、その問題の始まりである18世紀後半から19世紀初頭の時期における、同地域の「国際問題化」に関する諸問題を明らかにすることにより、今日のルーマニア、さらにはバルカンの事象に歴史的視点から光を当てようと考えたことが、本研究を行うに至った背景であった。

2. 研究の目的

本研究は、現在のルーマニアの主要部分を成し、一般にドナウ二公国と呼ばれるワラキアとモルドヴァの二つの国家を研究対象として、国際関係史の観点から、18世紀後半から19世紀初頭にかけての二公国をとりまく国際関係の変容過程を実証的に明らかにすることを目的とするものである。それは以下の二つの問題関心に基づいている。一つは、同地域がどのような過程を経て西欧中心の国際政治システムに包摂されていったのか、という大きな問題のうち、その初期の過程を明らかにすることにより、現在のEUの東方拡大とルーマニアのEU加盟という近年の事象を歴史的観点から眺めるためである。もう一つは、より巨視的に、二公国が西欧諸国とロシアと結びつきを強める過程で、18世紀以降西欧世界とのつながりを急速に深め西欧国際システムに加わりつつあったロシアとオスマン帝国が、18世紀後半以降、両公国の

諸問題を通じていかに諸関係を相互に緊密化させて統合へと向かったのか、という西欧国際システムの拡大の具体的な諸相を明らかにするためである。

以上のような問題関心に基づき、本研究では18世紀後半の最初のロシア・オスマン戦争の開始される1768年から、19世紀最初のロシア・オスマン戦争の終結する1812年までを研究対象とし、明らかにすべきより具体的な課題として、以下の4点を設定した。

(1)18世紀初頭にワラキア・モルドヴァに導入されたファナリオット制度。すなわち17世紀までの、現地ボエール(貴族)から推挙された人物を公として任命する制度に代わって、オスマン政府が直接公を任命し派遣する制度の実態。中でもオスマン政府による新公の選出システムと、これへのロシアや西欧諸国の関与。

(2)オスマン政府と二公国間の、政治経済的な権利・義務関係の変遷。1768年の露土戦争開始以前にイスタンブルに対し二公国が負っていた義務と、その後の変化。ロシアが戦争終結以降、ドナウ二公国のオスマン政府に対する義務・負担の軽減を目指していたことはすでに明らかであったが、それが1774年以降、具体的にオスマン・二公国関係にいかなる影響を及ぼしたのか。

(3)上の(2)に関連して、ロシア及び西欧諸国(特にハプスブルク帝国とフランス)が1768年のロシア・オスマン戦争以降、ドナウ二公国に対し有するようになった政治的経済的つながり。すなわち18世紀後半のロシア・西欧諸国の対ワラキア・モルドヴァ政策とその具体的な進出過程。本課題対象時期は黒海交易がロシアと西欧諸国にも開放されていた時期であり、そのためドナウ下流域に位置するワラキア・モルドヴァへの関心が高まった。こうした進出と、(2)で述べたオスマン・ドナウ二公国関係の変化との関連を探る。

(4)ロシア・西欧諸国とオスマン帝国との外交関係の中に占める二公国問題の位置。外交史料の分析を通じて、二公国に対する各国の態度や二国間関係における同地域の問題の重要性を明らかにする。

これらの具体的な問題の解明により、前述の二つの大きな問題を考察した。

3. 研究の方法

本研究の対象を図式的にとらえれば、中心にドナウ二公国があり、その周辺をロシア・オスマン帝国・西欧諸国の三つの頂点が取り巻いていると考えられる。そのため、18世紀後半及び19世紀初頭のユーラシア西部の国際政治における二公国の位置を理解するために、中心と三つの頂点間、そして三つの頂

点同士のそれぞれの政治外交関係を丹念に辿ることが、本課題の研究手法である。研究遂行に当たって最も重要なことは、必要な史料をいかに入手するかである。本邦においてそれ程研究が行われていない領域であることから、本課題に関する先行研究や関連研究文献の中には、日本で入手が難しいものもあり、また最も重要な一次史料に関して、刊行されているもののみを使用するのでは全く不十分であるため、研究費の多くを海外での史料調査、及び関連一次・二次史料の収集に費やした。

これまでの研究経過の概要は以下のとおりである。本研究を開始した平成 19 年は、初めに、問題背景の把握と理解のため主に先行研究文献の収集と先行研究の整理を行い、その上で、冬から春にかけて実施したルーマニアのブカレストとトルコのイスタンブルでの史料調査で、ルーマニア語とトルコ語の関連研究文献、ワラキア・モルドヴァとオスマン政府間、ロシアとオスマン、ハプスブルクとオスマン関係を示すオスマン文書史料を収集した。続く平成 20 年は、前年度の収集したオスマン史料の分析を行いつつ、前年度不十分だったオスマン史料の調査・収集を継続した。特に 18 世紀後半のロシアとオスマン帝国間の政治外交関係についての分析を進めた。平成 21 年度は、西欧側史料の収集と分析に取り掛かり、パリの外務省外交文書館にてモルドヴァ駐在フランス領事の報告を調査した。そして最終年である平成 22 年には、札幌の北海道大学にてロシア側の刊行一次史料を調査し、そして春にウィーンにてハプスブルク帝国側史料の収集を行った。

以上のように、18 世紀後半から 19 世紀初頭におけるオスマン、ロシア、西欧諸国（特にフランス・ハプスブルク帝国）のそれぞれの対ワラキア・モルドヴァ政策と、三者間の外交関係における両公国問題について、オスマン、ロシア、フランス、ハプスブルクのそれぞれの刊行・未刊行の外交文書史料を中心に、その他条約集や法令集、オスマン帝国については年代記なども補助史料として利用しながら研究を行い、以下に述べるような一定の成果を上げることが出来た。

4. 研究成果

2. の欄で挙げた(1)から(4)までの 4 つの具体的な研究課題について、明らかにした内容は以下のとおりである。

(1)と(2)は、宗主国であるオスマン帝国と、その附庸国であるワラキア・モルドヴァ両公国の中心 = 周縁関係の変容に関してであるが、これについては、オスマン帝国とロシア帝国との間で 1768 年に勃発した戦争の結果、1774 年に和平条約としてキュチュク・カ

イナルジャ条約が締結されたが、その中の両公国に関する第 16 条、その他通商関係を定めた第 11 条などの内容が、その後のロシアによる両公国進出をもたらす決定的に重要な要因となった。またその後ロシアはオスマン政府によるワラキア・モルドヴァ公選出のプロセスに関与し、また両公国のオスマン政府に対する経済的負担の軽減を一貫して押し進め、さらにそれまで慣例として明文化されていなかった両公国のオスマン政府に対する権利・義務関係を、明文化させるようにオスマン帝国に圧力をかけることなどにより、オスマン・両公国間の宗主・附庸関係を弛緩させることを目指した。

(3)のロシア・ハプスブルク帝国とワラキア・モルドヴァ両公国との政治経済関係の構築に関して明らかになった点は、1774 年以前においても、17 世紀末や 1736 年の両帝国とオスマン帝国との戦争時には、両帝国とワラキア・モルドヴァ両公国間の接触が見られ、両公国のオスマン宗主下からの自立の動きも一部見られたが、それは戦時に限られ、平時においては両帝国の影響はほとんど見られず、オスマン政府による支配が十全に行われていた。1774 年以降ロシアの両公国進出が明らかになると、ハプスブルク帝国も進出を開始し、特に 1781 年に両帝国が同盟条約を締結すると、共同でオスマン帝国に圧力をかけた。その結果として両帝国が実現した重要な成果の一つが、ワラキアとモルドヴァにおける領事館あるいは通商代表部の設置であり、これがその後の両帝国とドナウ二公国との接触において重要な役割を果たす。

(4)の西欧諸国・ロシア・オスマン帝国間の外交関係における両公国問題については研究成果の取りまとめの最中であり、近く公表する予定であるが、現時点までに明らかになったのは以下の点である。1768 年のロシア・オスマン戦争の和平において、ロシア・オスマン間で話し合われる両公国に関する講和条件についてハプスブルク帝国が介入し、これがロシア軍占領下の両公国のオスマン側への返還に決定的な及ぼした。また 1774 年の条約締結直後にオスマン帝国がモルドヴァの一部であるブコヴィナをハプスブルク帝国に割譲したことは、ハプスブルク・オスマン両帝国がロシアを牽制する意味を有していた。1780 年代前半のロシア・ハプスブルク同盟が、ワラキア・モルドヴァに関するオスマン・両帝国間の協約締結をもたらすなど、両帝国のワラキア・モルドヴァ進出に大きな役割を果たした。1790 年代後半からイギリスとフランスが、ブカレストに領事館を開設するなど両公国への進出を開始し、1800 年以降オスマン・ロシア・ハプスブルクに加えて英仏両国もワラキア・モルドヴァ問題に深く関与した。それ故 1802 年のロシア

が両公国に関するさらなる権利を獲得すると、これが特にフランスを刺激し、両公国の問題はその後フランス・オスマン帝国間の接近と1806年のロシア・オスマン戦争勃発の直接の原因となるほどの大きなインパクトを与えることとなった。

以上のように、オスマン帝国の附庸国であるワラキア・モルドヴァのドナウ二公国には、1774年のキュチュク・カイナルジャ条約を契機にロシアとハプスブルク帝国の影響が強く及び始め、両帝国とオスマン帝国との間においても政治外交問題となっていた。それと同時に、諸外国、特にロシアの介入によりオスマン・両公国間の宗主・附庸関係も変容することとなった。そして1780年代にはロシア・ハプスブルク両帝国のワラキア・モルドヴァへの影響力はさらに強まり、90年代にはイギリスとフランスの進出が開始された。そして19世紀初頭までにドナウ二公国は西欧・ロシア・オスマン帝国間の複雑な政治外交関係に組み入れられ、ロシア・オスマン戦争を引き起こすほどの国際政治における重要な外交問題となったのである。

このような一連の問題が明らかになったことにより、1774年以降急速にドナウ二公国を中心に西欧・ロシア・オスマン帝国間が政治外交関係を緊密化させ、一つの国際システム形成へと向かってゆく具体的過程の一端が明らかになった。これが本研究の大きな成果である。

本研究を推進する中で新たに浮かび上がった最大の課題は、18世紀後半-19世紀前半の西欧諸国やロシアの対ドナウ二公国政策およびバルカン政策は、ことごとく黒海地域への進出と結びついているという事実であった。下の「5. 主な発表論文等」の項目の雑誌論文で論じた例を挙げれば、1780年代前半にロシアとハプスブルク帝国は、オスマン帝国に対して両公国問題に関する要求を突き付け、現地に領事館・通商代表部を設置することに成功したが、その要求は黒海通商とクリム・ハーン国併合の問題と絡めて行われた。両公国は、ロシアにとっては黒海周辺地域の一部として、ハプスブルク帝国にとっては黒海への通過地として位置付けられ、両公国問題は両帝国にとっては広く黒海進出をめぐる問題の一部と認識されていたのである。従って、バルカン問題を通じた西欧・ロシア・オスマンの統合と西欧国際システムの拡大、という上の研究課題の本質を理解するためには、今後三者の対黒海政策全般を詳細に跡付けて明らかにすることが必要であり、その後その中にバルカンの問題を位置づける作業を行わなくてはならないと考える。

本研究は、西欧・東欧・イスラームの三つの「世界」の交差するバルカンの問題を、そ

れぞれの一次史料に基づき明らかにしようとするものであった。歴史学と東洋学、西洋史と東洋史、ロシア・東欧地域研究と中東・イスラーム地域研究など、ディシプリンの狭間にあるこの研究対象は、従来、三つの「世界」のうちの一つ、多くて二つの視点から研究が進められ、それも不十分なものであった。従って本研究のような三方向からのアプローチは、従来の研究には見られなかった新しい点であり、本研究の成果は、国内は言うまでもなく、世界的に見ても重要であると考えられる。今後、この成果を英文で発表し広く国外に発信することが重要であると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

黛秋津「オスマン帝国における中心=周辺関係の変容に関する一研究 18世紀後半のワラキア・モルドヴァとの宗主・附庸関係」『東洋文化』、査読無、91号、2011、77-98頁。

黛秋津「「黒海地域」という地域認識 歴史的視点からの一試論」『ユーラシア研究』、査読無、42号、2010、40-45頁。

黛秋津「ワラキア・モルドヴァにおけるロシア・ハプスブルク帝国の領事館設置問題 18世紀後半における黒海の国際化との関連で」『東京国際大学論叢 経済学部編』、査読無、42号、2010、177-197頁。

黛秋津「ロシアのバルカン進出とキュチュク・カイナルジャ条約(1774年) その意義についての再検討」『ロシア・東欧研究』、37号、査読有、2009年、94-105頁。

[学会発表](計3件)

Akitsu MAYUZUMI, “Challenging ‘the Ottoman Lake’: Internationalization of the Black Sea Region in the Second Half of the Eighteenth Century” (Black Sea Region in International Relations: Old Issues, New Trend, International Symposium, 1-2 October 2009, Bogaziçi University, Istanbul).

Akitsu MAYUZUMI, “The Second Half of the Eighteenth century as the Origin of Modern International Relations in the Black Sea Region: A Beginning of Conflicts among the Three ‘Worlds’” (北海道大学スラブ研究センター2008年度冬季シンポジウム、北海道大学、2009年3月5日)

黛秋津「ロシアのバルカン進出とキュチュク・カイナルジャ条約(1774年)」(2008年

度ロシア・東欧学会研究大会、名古屋学院大学、2008年10月12日)

〔図書〕(計1件)

六鹿茂夫編著、著者黛秋津、他17名『ルーマニアを知るための60章』明石書店、2007年、全391頁、担当部分87 - 100、199 - 202、216 - 219頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黛 秋津 (MAYUZUMI AKITSU)
広島修道大学・経済科学部・准教授
研究者番号：00451980

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：